



～5月26日校内研（指導助言②）～

1.探究活動の段階的ステップ

探究とは単なる「自由」ではなく、「①確認する探究」「②構造化された探究」、「③導かれた探究」、「④開かれた探究」、という明確なステップを踏む必要があります。

育成したい力が、単元と授業の交互においてしっかりと反映されているかを確認しながら進めることが大切です。

【補足説明】

授業全てを「生徒に委ねる」わけではありません。今回の理科では、「課題（問い）」は教師が設定し、「化学変化後の質量（結果）」と「実験方法（過程）」を生徒に委ねることを考えていました。

委ねる時間がある＝生徒に身につけさせたい力を使う時間がある、ということです。

単元（授業）のなかの「問い」「過程」「結果」のどの部分を生徒に委ねるのか、ということです。

もちろん、これは教科性や学習内容によってはできる部分とできない部分もあるかと思います。

委ねるということはある意味、何が起こるかわからないからこそ不安や問題も生じるかもしれません。

しかし、授業は生もの、その時々にもまれる生徒の発言や思考、それを教師が扱い、架け橋となることに授業の面白さがあります。怖がらず、失敗を恐れず、チャレンジしてみてください。

2.ファシリテーターとしての教師と授業改善

板書の工夫

板書をあらかじめ構造的に準備しておくのではなく、生徒の意見を引き出しながら「構成的」に書き出していく（矢印を向ける等）技術は、中堅以降の教師にとって非常に重要な力です。

教師のスタンス

ファシリテーターとしての役割を持ち、旧来型の講義授業を中心にするのか、生徒に委ねてオープンにした後にまとめて絞るのか、教師自身が自分の立場・スタンスを持っておく必要があります。

【補足説明】

ICTの普及により、教材の提示や作成、生徒同士の共有が容易となり、教師の働き方が大きく変わりました。実際、この通信も「音声入力」を行い、AIに体裁を整えさせています。ICTやAI活用をしている私ですが、授業におけるICTの多用には否定的です。

なぜなら、ICTの活用が学力の向上には直結していないと考えるからです。たとえば、スライドで授業を進めた場合、テンポや教材の選択肢（写真・動画）としては良くても生徒の記憶に残るか、と聞かれると疑問です。深く考えずに受講するため、脳に残らない可能性があるからです。

つまり、1時間の授業（学習）の履歴を残す、考えるきっかけのためには黒板を活用することも必要だと思っています。

また生徒に委ねた活動の場合、生徒の雑多な思考や発言を教師の手腕で（ファシリテータとして）まとめるためにも黒板を使うことが大切だと思っています。

どんな答えが出てくるか、それをどのように扱うか、どんな言葉として黒板に記録するか、そこに授業の面白さがある。と私は考えます。

※補足説明は私（臼杵）の主観が大きく入っています。これが正解ではなく、一例です。授業改善とはある意味「探究」です。結果（学力向上・10年後も使える力の習得）のため、問い（課題）と過程（方法）を考える。終わりのなき探究だからこそ面白いとは思いませんか？

学校公開への道のり



STEP1

5月26日校内研修① 大阪教育大学 森本和寿氏
『代表授業を通して、授業の在り方を考える』

STEP2

教科ごとの代表者による公開授業



今、ここ！
1 学期は試行錯誤！

STEP3

8月21日 校内研修②
『全国学力・学習状況調査の分析会』

STEP4

11月24日 学校公開（校内研修③）
『全クラス授業公開・代表者授業』

STEP5

1月25日 校内研修④

STEP2 教科ごとの代表者による公開授業

【公開授業までの大まかな流れ】

① 自分の考えの言語化

- 一、生徒にどんな力をつけさせたいか
- 二、どんな授業をしたいか

② 単元の流れを大まかに考える

- 一、単元設計を考える（バランスや構成）
- 二、力をつけさせるための仕掛けをどこにするか

③ 単元の流れを細かく考える

- 一、1時間ごとの構成（内容）
- 二、各授業ごとのめあて

④ 単元計画を作成する・プランシートに入力

⑤ 教科部会で練り上げ→授業実施

⑥ 教科部会で振り返り

※公開授業は各教科1名ですが、学校公開は全クラス（14クラス）公開です。学校公開の授業者は指導案（簡易的なもの）や授業デザインシート（どんな力をつけさせたいか）の作成をしてもらおうと思っています。担当になったら・・・という消極的な気持ちではなく、とりあえずやってみるか。という気持ちでやってみましょう！ゼロベースでもOK！そのための白紙です。ひと声かけてください！